

<p>書名 『夜廻り猫 2』</p>	<p>著者 深谷かほる 出版年 2017年 出版社 講談社</p>
<p>「むっ、心で泣く涙の匂い…！」いつもこの言葉から始まる漫画『夜廻り猫』の主人公猫の平蔵は、猫にも人間にも救いの手をさしのべる。あるときは懇々と諭し、あるときは叱り、あるときは説教する。そして慰め、甘やかし、見守る。まるで今はいない「ご近所のご隠居」のよう。人の不幸を見過ごしにはしておけない、そして眼光鋭いが、頭の上にはサバ缶をのせたおどけた姿で、どてらを引っかけて、丸い背中をもっと丸くしながら、二足歩行で立ち去る姿の、なんと哀愁を帯びたたたずまい。</p> <p>ある女性が母親に、夫と別れたいと切り出しました。母は「飲む打つ買うはない。借金も暴力もない…。それなのに！？ そんなのいい方よ、私なんかね…。」と、いっこうに理解してくれない。それを窓辺で聞いていた猫の平蔵は、「あいや 待たれい。殴るだけがDVではありませんぞ。怒鳴る暴れる助けないは立派なDV。」すると、病気の赤ん坊を抱えた母親が、「ひと間でもいい。ビクビクしないで暮らしたい。子どもと二人、死んだって今より納得いくから離婚するの。」すると平蔵は帰る道すがら、一緒にいる友に向かって、「あ の人は泣かなかった。涙を流す余裕ができたか、また来よう。」と言いながら去って行く。</p>	